51

光

第五十一輯

大正十五年三月

◆生活の創作……西田天香

◆臺灣に學ぶ（上）……松下吉衞

◆省みて……八田勝三

同人懺悔報恩の奉仕者

祈願　不二の光明によれる生活

費用　供養されたる淨財

◆生死托鉢（中）……住田無相

◆東京一燈園道場開扉の歌……野木ふみを

◆未明の先驅者（五）……水上鐵治郎

◆働く者の家日記……S・T生

一燈園・宣光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆俱成就大圓覺

別願　將來世界眞平和

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脫るゝことを得べき。願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の清規に隨ひ世諦を成ぜむ。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生產業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至清規戒行も、此の見地よりすれば即ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは、個中の消息もとよく言辭の擧說し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその淸規を守ることによりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絶し、以て齊家治國平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

生活の創作

西田天香

此間から續いていろ〳〵お話しましたが、それを練り上げて行くと、とも角、一燈園生活の一通りであります。微細に注意して增上慢を起さず、愚の如く魯の如く孜々として怠らず、願が大きくなり進むに從つて、その人の癖といふやうなものも整理されます。總てを具足體得せんとする事は、大事業であります。それを思へば自分の癖や習慣を矯める位は、小さな事であります。煙草を吸ひ、酒を飮むも惡いとは云はぬが、いつでもやめられる內容がなければならぬ。托鉢を賴まれる事は、こちらの修業でありますが、そこに立つて人のよいやうにと動き出す時、自利利他であります。鳩の如くやさしく、蛇の如く聰しかれと、利他の行になると、優しい中に蛇の如く聰しくもありたい。それはお光の智慧が入るといふ事なのです。十一面觀世音や、又千手觀音のやうに、多方面を觀察しつゝ、多方面に働き出すのです。前の生活は破戒無慚でありました、今の生活は、戒定慧の三學が揃はねばほんとではないのです。一燈園は生活の戒を保ちに來るところであります。戒といふと、眞宗派の人なぞは厭ひますが、正しい生活をする事であります。戒定慧の戒は、正しい生活に還る事で、一燈園生活は、自然の生活で、無理のない正しい生活であります。定は心が無相になりどんな事にも障りがなくなり、透明で私心がはたらかず、明鏡を胸に掛けたやうに、草あれば草を映し花あれば花を映す、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

水月道場を心にうつす事それを定力と云ひます、又入定とも云ひます。彗は世間のすがたを知る智慧です。どんな事でも此鏡に映すと、正體を現はさないではゐられない、その正しい智慧を以つて、あらゆる相を觀察して、これはどうすべきかと問はれた時、確かり判斷して間違はぬ、適當な方法を敎へる事の出來る、それが利他行であります。人に求むるところなく、自分のうちから滾々と出て來る然も價なく人に施して盡きる所がない、これ還相回向であります。これを形に表した人では良寛や桃水和尙のやうな方がゐられます。女房も子供も持たず、路頭を徹底して行かれました。愚の如く、魯の如く行つて、そのうちにお光の智慧を得て、前の生涯で專門の事を勉强して來た方が、此生活で我慢や我執を整理し淨めてから又元の專門のわざへ還ると、鬼に金棒となります。盜人習ふてせぬがよい、と云ひます。盜人とはどんなものか、それを知つてせぬがよいのです。相場もどんなものか知つてゐると、それで往き詰りの方を整理するに都合がよい、障りなく知る、先方から現はれて來た時、如實に之を映し應用し方便を以て整理出來ねばなりません。世間を、うるさいと逃げず又執着せず、いつも整理する願に進み、そして妻をもち子を持つこれが宣光社的の理想であります。

次に結婚に就て、自分だけなら簡單に行けるが家庭を持つと複雜になる、といふてためらふ人もあらうと思ひます。それくらゐ出來ない樣な生活ではない。また家庭を持つなら、宣光社的でなければ**往き難い**、といふ人もありますが、**一燈園生活で家庭的に平和に行ける私に確信があり現に私が長**い間それを經て來ました。併しいろ〳〵と心の用意は入ります。なか〳〵一ト通りでは具合よくまゐりません。燈影塾で私は今、一燈園生活の家庭をもつ持ち方に付いて研究してゐます。常に夫婦とも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

路頭の覺悟はしてゐねばなりません。夫婦で遍路が出來るやうに、夫婦で托鉢をするのです。夫婦連れの者へ、一人の托鉢を望まれる場合、必ずしも夫婦一緒にゐねばならぬ事はない、甲の家へ托鉢に行つてゐる亭主と乙の家へ托鉢に行つてゐる女房でよい。私の家内が、或る家から托鉢を頼まれました。私の家内ですから夜分は歸らしてくれますかと聞きますと、夜も歸られると都合が惡いのでなるべく居て頂きたいといふので、では私が行きませうと云ふ事になりました。必要なだけは、聞かれます。またそれをきかれない程の價値のない托鉢ならしかたがない。夫婦が一つになる事は耻づかしい事ではない、ただそれに伴ふ觀念が卑しむべきものにならねばよい。亭主のところへ妻が歸り、妻のところへ亭主が行くのは當然である。そしてあなた方がゐて呉れると、家の障りがなくなる、明くなると重寶がられる。そんなに修業の出來た人は、どこへ行つても悦ばれる。禮を云はれながらも内々惜しまれるのは、どこか其人に缺陷があるのです。どんな家でも少し方法をすれば夫婦の部屋くらゐは、わけなく出來るものです。女房の托鉢が眞劍であれば、亭主がそこの托鉢をせいでも養はれます、又それ以上に亭主の仕事に參加せられもします。私の家内は何も知らぬ、一燈園とは何ぞやときかれても說明が出來ませぬ、何にも云ひませんが、賴まれた事だけは、だまつてする、深みはないが、それなり落ちついてゐる。私が居ないと、第一義を步いて行けないが、私の言ふ通りにはする、自分の思想がない、任せ切つてゐる。四國參り、よろしい、路頭よろしい、複雜なところ、よろしい、ただ賴まれるまゝするだけである。或る一軒の家で五年托鉢してくれたので、私はその間、その家で隨分澤山な客を容れ、茶菓を頂き、電話なぞは一燈園の方がよけい使ふた程。家内が素直でなか

つたら、こゝまで夫婦の一燈園生活を、完成する事は出來なかつた事でありませう。まだ出る時供養をされました。それはまた何かになる事でしよう。無批判で托鉢する功德であります。

女房持つて手前の生活が崩れる筈がない、女房の托鉢がこれ程であるのに、女房が亭主の托鉢先きへ歸つて養はれぬやうな事はない。

電車の動く時、自轉車が、その電車のどこかをちよつと、つかまへて走る樣な事を見ます、それのやうであります、電車に連行されて行く自轉車、手を放しても自轉車は、徐行して行く。手を放す時、男、女、とそれ〴〵の托鉢となり、手を繼ぐ時、夫婦であります。夫婦が一つになり、大自然に還る時、案外自由に、無邪氣となります。亭主はかうすべきもの、女房はかうすべきものとせず、たらぬところも拜み合ひ、妻は托鉢の中から、亭主の洗濯などして行く、それ等の餘裕はまたあるものです。

本當の生活の規矩は、世間に直接交涉して、亭主に依らず、女房に依らず、或は死に別れても、悲しまぬ底のものです。東京の或る人の別莊を一燈園の夫婦の托鉢者が預けられてゐます。一燈園の預るのは、普通に預るのではない、まかせ切つて安心されてゐる、安心される事に對しては、又總てに處して明らかな光の智慧が働かねばならぬ、智慧が働かぬと伸びない事もあります。

女性は、主義一貫するといふ往き方は少ないが、その時々に優しいものゝ發露は、天性でありませう、又一面その爲に、亂すといふやうな事もあります。私は女房に云ふた事があります。常は夫婦であるが、もし道の事で、私が話をする時は、私の傍でなくずつと下つて、下坐にゐてくれるやう、道

の上では、家內よりも勝れた人がゐます。そうでないとまたいろ〳〵、混雜します。板倉勝重は、元坊さんでありましたが、京都の所司代を頼まれた時、歸つて女房に相談して見ると云ふたので、一同笑ひましたが歸つて女房に相談しました。家內は、どうぞ私などに御相談なくとも御都合のよろしいやうに、といふので、夫れならよいが、これから役向の事に就ては絶對に關係せぬやうと、約束して所司代を引受けました。所司代は、今の警察、裁判所といふやうなところでありますから、隨分家內へ、割り入つて、物を贈つたり、面倒な事が多いので、前以てこれを戒めたのです。そして袴をつけ出司せんとする時、袴の襞積が振れてゐたのを見た妻は、何心なく、直さうとしますと、勝重は、役向の事、控へよと叱りました。抽象的に話して置いて尙如實に急所を押へたのは勝重に餘程用意があつたのです。妻は、其一言にハットして、役向の事は絶對に口を入れなかつた、それで名所司代であり得たのだと云はれます。

　內助の功とて家內には一仕事のあるものであります、女は女として、それぞれの受持があります。御奉公の時も、人の云はれるまゝに、そして夫婦は一つ、仕事は別であります。

　或る夫人が、私の主人は道樂をして困りますといふ。主人は又、私の道樂は交際の上でしてゐるのですが、家內は派手が好きでそれが止みませぬ、私の儲けの大半は、家內の贅澤費と消えて仕舞ひます、家內がもし、一燈園生活をしてくれるなら、私は道樂を止めますと。ところが夫人は、私はそんな生活が出來ませんといふのです。こんな風で家庭は、いつまでも不平が續く許り、どちらか一方反省して眞實の生活に入れば、其福田が延びて互に我まゝは出來なくなるのです。

　次に交際はまた、生活をともすると、取り亂す事になります。

香奠のかはりに一日身をもつて往く、すると香奠返しさせる面倒もなく、人夫雇はせる事もなく、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

よろこばれるのです。私の家内は元奥田といふ姓でした。盆と正月に、奥田家の墓へおまゐりして、お供養がしたいのです。私は此頃それを何とも言はず干渉しません、奥田家の檀那寺から頼母子を頼みに來る、ちよつとためらふ、自分に供養された金がある、私の顔を見てゐる、頼母子は入らずに別に供養させて貰ふたらと相談する、徹底したら、そんな事しないでよいのです、お金出すかはりに、墓掃除させて貰へばよいのです。私の義理の弟卯三郎が、秋田にゐた頃、一人の爺さんの看病をしてゐた時、母危篤の電報が屆きました。卯三郎は、今、一人の爺さんの看病をしてゐる、これをあなたの病氣を見てゐると思ふて頂きたいと返事しました、そして卯三郎が懸命に佛參してゐる時、み灯しが消えました、その時母が息を引取つたのでした。母の臨終にさへ行かぬ、そこをそのまゝ墓場にして祈つてゐる。無一物の一燈園生活の基礎は、めい／＼がこんなにしてかためられて行くのです。

或る婦人が、あやまちをして產れた子供を育てる事を賴まれました。私にまだ家内のない時でした。傍の人は驚いて、奥さんもなく乳もないのに、どうするのでしようと心配されました、實は私もどうしたものだらうと思ひましたが、お光は、どうかなされてくれるのであらうと、決心して、母から子供を受取らうとするとき、母親は、どうぞ乳だけ飲まして下さいと嘆願せられます。自然は妙なものです、此母親は乳があまるのです、私は此子はお光の子であります、心持を改めねば、此子の身は養はれませぬ、と云ひますと、その母は、これから吃と謹しみますとて悔い改めて、お乳を飲ませる事になりました。其母親の姉がまた、どうぞ此子の着物だけは私にさせて下さいと云はれます。此子はお光の子であります、贅澤をしてゐるあなたが、そのまゝではお光の子の着物は作る事が出來ませんと申しますと、其婦人も、懺悔して、出來るだけつましくして、そのうちから此子の着物をこしらへさして頂きますといふ事になりました。母と姉の心を悔ひ改めさして乳と着物が出來ました。それこそほんとに美し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

い赤兒が受けるにふさはしい、美くしいお乳と着物とでありますまいか。表面の美しさは何の意味もない、ほんとの美しい心から湧くものこそ、好ましいものであります。世間では、オールバックに髪を結ふ事がはやります。一燈園では、一燈園式の、オールバックであります、自信があれば、これでよいのであります。

あるのが惡いのではない、絹が惡いのではない、Yさんといふ方が、木綿は無いので着ませぬが、これから買はないで、あるものを着つくして仕舞ふつもりですと云はれます、木綿でなければと、執はれてもよくない、用ひかたが清淨なら、何を着てもよい、一燈園は皆創作である、杓子定規ではない。

質素であるべき筈の寺には金襴や立派な掛物などを用ひられてゐるのは、在家でやり場所がなくて寺へ持つて來るやうにおもはれます、澤山衣裝など持つた娘さん達が、死なれて、仕方がない、せめて菩提の爲といふやうな事で寺へ持つて來る、そんな事から袈裟や衣が立派になつて行つたのでせう。私の家内も此生活に入る時、帶を坊さんの袈裟にしたのでその時そう思はれました。一燈園でも心から供養せられる時、どんなものでも障りにならぬが、ほしいと云ふ氣持は、許されませぬ。

敎育に就て、中等敎育が學校でなければ出來ないといふ事はない、同人の中で受持を分け合ふて、程度、程度の敎育が出來るやうにと思ふてゐますが、今はまだ外の托鉢ばかりで、何れ、も少しまとめて何とかなる事と思ひます。

お光の智慧が豐かになると、家庭をもつて貫く事は何でもない事であります。鳩の如く優しくて、定と慧とならび行はれ、嚴肅に戒が具はつてこゝに一燈園生活はいよ〳〵完備するのであります。

—大正一四、八、二〇朝、一燈園に於ける天香師講演筆記—

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

臺灣に學ぶ（上）

松下吉衞

臺灣へ私の弟が呼ばれて行つて、もう四五年にもなるで御座いませうか、續いて托鉢させて頂いて居ります基隆の平戸商店が、今度、ハッキリ營利主義によらない商店經營を志され、其組織替の御相談にお招きを受けまして私はあちらへ參ることになつたのであります。これから私の申上げますのは、先づ平戸商店の經營法改革の問題を中心としまして、臺灣に於ける內地人の狀態、本島人の模樣內地人と本島人との關係、蕃人の生活及び一般社會狀況についてゞありますが、何分にも旅行半にして突然父がガンの手術を受けるので大學病院へ入院したとの電報に接しまして、急遽旅程を變更して歸つてまゐりましたやうな次第で、調査資料もそろはず、また歸來早々雜多な用事に呼ばれて、まだ見聞した事柄を落ち着いて考へる時間すらありませず、どんなお話しが申上げられるやら、折角お集りになられた皆樣に對して實に濟まないと思ひます。いはゞなぐり書きの私の旅行日記のやうなものとして、お聞き下さいますやうに。

神戸を出帆しましたのが一月十八日の正午でありました、船は大阪商船の扶桑丸、一萬五千噸もある近海航路には珍らしい大きいもので、船賃三等二十圓でありました。半日はあの靜かな瀨戸內海の景色を賞でて門司に着き、翌朝此處で日一ぱい碇泊しまして愈々外洋へ向ひましたのは午後四時過ぎであ

りました。玄海灘では少しゆられたので、私もいくらか船醉したらしいのです。これから航行すること正味二日半。基隆港外で又一寸ゆられて二十二日の朝無事に入港が出來ました。

基隆港は規模の小さいにも關らず一萬五千噸の大船を安々と入れます。丁度此頃は毎年のならはしで十月より三月にかけての降雨期に當つてをりまして、霏雨蕭々とふる中を、平戸商店主、弟勝朗等に迎へられて上陸いたしました。

平戸商店は基隆、臺北、新竹、臺中、嘉義、臺南、高雄、臺東、花蓮港、宜蘭等本島各地に十ヶ所の本店支店分店を持つ大きな食料品雜貨商でありまして、私が參りますと直ぐこの本店支店によつて組織されてゐる平心會の總會が開催されまして、一月二十五、二十六、二十七日の三日間に亘り、毎日朝も早くから夜は十二時過ぎまでも休みなく種々な問題を練られました。會員皆様の熱心と眞面目には寧ろこちらで學ばされた所が多く、私も汗ダク〳〵で組織がへの或る成案を編ませてもらひました。この平心會のことから先づ申上げませう。

平心會の代表者であり本店の經營者である平戸喜代治氏は今から十五六年前僅か百五六十圓の金を懷ろにして、志を立てゝ郷里の神戸より臺灣に渡られ、初めは少年時代から奉公して御經驗のある漬物の商店を基隆にお開きになり、營々苦心の結果、今日各地に支店分店を置く信用ある臺灣屈指の食料雜貨店の基をすゑられたのであります。食料雜貨の方へ手をおのばしになられたのは三年前とのことですが、その動機は當時臺灣の食料雜貨品が非常に高かつたものですから、内地の原產地について親しく研究されたところ、新開地によくある例で暴利を貪つてをることが分りましたので、相場表を月々

公表し現金主義でやつて見る氣になられたのださうであります。

今この平心會の內容にふれる前に、平戶商店と一燈園との因緣について述べることが適當のやうに存ぜられます。

弟は最初臺中の松本安藏樣の處へ一燈園からやつて頂いたので、松本樣が組合長をして居られた臺中信用組合の帳簿係りを務めたのださうでございます。ところが同地の平戶支店の前をよく通り〴〵した爲めか、或る日のこと、ふと呼び込まれまして、是非托鉢をと乞はれましたので、最初、山口源吾さんにおいでを願ひ、山口さんは例の沈默勞働の祈りで袋貼りなどなされたさうですが、弟は信用組合の御用が段落になりましてから此度は自身が寄せて頂いたのださうです。內地に居る頃弟は銀行事務の經驗を少しばかり持つて居たのですが、臺灣も內地も同じこと、一般の商店で簿記など實施するものがなく、平戶樣も御多分にもれなかつた方で店の經濟と家計とがはつきりして居らず、所謂大幅帳式の不完全な記帳法であつたのを、復式簿記法によつて整理してあげたのださうです。所が今までの大まかな胸算當による收入支出の上に、少なからぬ錯誤や見當違ひのある事が發見され、每月の正確な棚卸は、損益が數字的に表はれ、各種商品の回轉率も推知され、商品仕入の根本方針が立ち、とかくあいまいになりがちな家計もハッキリするし、財產狀態が一目瞭然に分りまして、いはゞ演習するに參謀本部の地圖が與へられたやうなことになつたのであります。偶々本店主人の平戶氏が同支店に來られ、この事實を見て是非本店にもとお招きにあづかつたので、弟はそれから基隆の本店へ御奉公することになつたのださうです。斯うして簿記法の效果を確信された平戶氏は全島の支店分店にま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

で多少の無理は押し通してこれを實施する方法を立てられ、その爲めに約千圓もの帳簿其他用箋の費用が掛つて稍意外に感ぜられながらも、弟を各支店へやつてまで店の方々に簿記法を實習して貰ふと云ふ熱心な態度を採られましたので、之れはやがて各支店の營業成績の上にも眼に見えて良い結果を現はしました。斯うしたことのある中に弟は過分の御信頼を受けることになり、一燈園生活の根本義に對する平戸氏の御共鳴も得られ、今度いよ〳〵營利主義でない經營に商店を革められるといふ大勇猛心を起されることになられたのであります。

爭はれないもので、かうした意氣は平戸商店に一歩はいりましても直感されます。店の正面にこんな額が掛つて居ます。

『相當の故なくして調和道の實修を五日以上に亘つて怠りたる時は百圓以上の罰金に處す。』

として、平心會代表者平戸喜代治の署名がしてあるのです。皆さんがこんなに藤田靈齋氏の調和道の熱心な實修者でありまして、朝は黎明に家内一同婦人子供に至るまで、床をはなれ水を浴みて體を淨め二階大廣間に集つてお祈りをなさいます。その順序は先づ恭しく手をついて「お早うございます」と挨拶を述べ合つてから主人が導師となつて、一燈園經要の般若心經、壽量偈、維摩經偈、修證義、四弘誓願等を讀誦され次ぎに調和道をなさいます。そしてその調うた心と淨められた體で、主人家族店員各がし或は帳場に、或は店頭に、或は行商に或に臺所に向はれるのであります。夜はまた夜で特に病弱の者の爲めに調和道の實修がございます。私は各方面で可成り多くの方々にあはせて頂いて居りますが、實業にたずさはつて居て彼程に道心ある人達を見ることは稀有であり商人の典型と申す

べきだと存ぜられます。

此度深く練り合ひました結果、商店經營の根本方針を、『道による商を生活にあらはすこと』とハッキリ揭げる相談になりましたが、利益金處分案なども實に徹底したもので、平戶本店は現在流動資本〇〇〇を有し純益金年々〇〇〇〇〇は確かであり、昨年の如きも〇〇〇〇〇の利益をあげて居りますが、主人はかう云はれるのです。

『この利益金を資本金に繰り入れ〳〵して行く時は商賣の規模が擴がつて行き富を增すことは出來ようけれど、さてどこまで行つてもこれでよいといふ際限がありますまい。自分の經驗によればかうした行き方は、決して眞に商人たる生活を味ふ道ではない。規模よりは寧ろ方法――どう商ふかに力を注ぎたいと思ふ。眞に商人たる光榮をシミ〴〵覺えるのは、自分の商を通して、お客さんの需要に滿足を與へ得たと感ずる時であつて、さういふ時には勿論損得の打算など超越してゐる。』

口に勞資協調を說く實業家は世に珍しくありません、併し、これを利益金處分にまで具體化する、自ら欺かざることと平戶氏の如きは滅多に居るものではありません。

平戶商店では本店支店の關係がまた實によい、支店の責任者は本店の平戶氏と血族關係にあるか、又は永年本店に勤めて主從關係に連つてる者でありますが、經濟上には各獨立して居り一種の聯盟組織といふことが出來ます。ですから商店經營の上に各其の個性を自由に發揮する事が出來、だゞ平心會の申合せは絕對に信奉せねばならなくなつてゐるのであります。此點は面白いと思ひます。

以上で平戶商店の輪廓は大抵御了解のことゝ存じますので、これから其內容に入つて行きませう。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

最初、店へ上りました時私の耳に頻々ひゞいた言葉は『兄さん、兄さん』といふそつちこつちからおこる呼ばはりでした。あとでわかりましたが、是れは主人のことをかう呼んで居るので、御家内さんは『姉さん』といはれて居ます。又店の方を仲間同志或は主人側でも『さん』づけにして呼び捨てには致しません。此の一事を以て平戸商店にどんな空氣が流れてゐるか察知することが出來ませうが、仕事が仕事であり色々な人が共同の生活を營んで居る關係上、人を全然宗敎的にのみ扱ふ事は出來ませず、あるがまゝな、慾も煩惱もあるものとして、扱ふことにしてをられます。一例をあげますと、基隆の店では官吏銀行會社員の住宅地區や船乘りの集團地區に數多の店員が箱車に食料品を積んで行商いたしますが、賣上げに對する一割を行商する店員に報酬として與へて居ります。自然是れは賣上高を增すことになり、店としては具合がよいのですが、あまり露骨に店員の利己心を刺戟する點が危いと言へば危いでせう。

斯樣に一面人間の利益心を其儘に認めながら他面に堂々道を標榜して立つて行く處に事業を實際に運營する妙用が在るのだと存ぜられます。

販賣して居る商品は品質第一のもので、北は北海道から南は九州まで一々原產地との直接取引であつて、他の商店よりも品によつては二割五分から安く賣つてゐます。なぜかう安く賣れるかと申しますと、一つは原則として嚴重に現金主義の販賣法を採つてゐるので掛賣の場合に何うしても免れぬ倒れから蒙る損失を見込まなくて濟むためでもありませう。

渡臺十五年にして店運今日の繁榮を見るにいたりましたのは主人の平戸氏が商賣其事に實に熱心で

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

あり研究的でありましたからで私共と一緒に見學旅行した際などでも、各地の公設市場や個人商店を視察しますと、支店に歸つてからすぐその日見たことによつて商品の陳列法を改めるといつたやうな具合であります。平戸氏はこんな述懐をなさいました。『自分は何らも商賣には熱心すぎて人間味を減殺し去つた傾きがあるやうに思へます。たま〳〵友人と落合ふ樣な時でも、何日の間にか自分の商賣上の問題に話をもつて行つてをり、また夫婦の仲にしても別に物云ひ爭ひをするといふのではありませんが、ほんたうに理解し合つて一つになつてゐるといふ實感が遺憾ながら充分でありません』と。

平戸氏は店員と一つにならなければといふお考から、三度の食事なども臺所で一家全體一所にとれることにして居りますが、六づかしいものでまだ學校にも行かれない小さい子供さんと、働き盛りの若者とは自然食物は一つにならないものがありませうし、そこに少し無理があるやうなので、子供のために、店員方とは別に家族だけで食事をとられることを日に一度たとへば夕食だけなりともなさつてはと、御相談があつた時、私は申上げたのです。家庭と產業とが道を中心にしてよく統一の實をあげ得るなら人間生活の理想は達成されたに近いと申されませうが、これは實にやさしくないことであります。口の宣傳者は多過ぎる程ありますが實行に對する誠意と熱心とを持つ平戸氏の如きは極めて稀でありませう。

現在、平戸本店には二十名程の店員がをりますが、賄一切御家内樣と一人の女中樣でなさつて居り費用は一人一日四十錢（？）の割で奥から店へ月々チャンと支拂ふと共に、奥で店の佃煮をとるにも罐詰一箇切るにも一々傳票を切つて記帳することになつてゐます。主人の經濟はどうなつてゐるかと

申しますと、月給として百圓、それに店の家賃として月々百六十圓合計二百六十圓取られて居ります が、是れで店主としてゞない一切の家計をなさつて居るのであります。

また店員の給料は實際の生活費を標準として獨身の番頭さんが三十五圓として妻帶してゐる者には 六十圓さしあげ、其間の均等は利益分配の際に考慮するといふ風になつて居ります。利益分配につい て合理的な標準はないかとのお尋ねもありましたが、各人の生活必要費の外、數字的に之れを表はす といふことは不可能であらうと、お答へしたもの丶其れではあまり漠然として居るので、次のやうな 案を申上げたのであります。

先づ二割を神佛に献げる、これは最も純粹な氣持で扱へ平和運動救濟事業の爲めに使つたらよいと 思ひます。それからお客さんに二割程あてたいのです。今迄は年末に「ヒラトみやげ」としてお菓子 を袋入れにした景品を差上げたさうでありますが、この主旨からのものを所謂景品と見られる様に扱 つては不適當だと思ひます。或は敎育的な玩具か、又は臺灣のやうな新開地の官吏會社員といふ人達 のおつれあひは學校敎育はありましても實地に導いて吳れるお年寄が居ないためか、臺所廻りのこと と言ふと驚く程御存じないさうですから、實際的な料理法献立等を連續の小冊子に編んだものを差上 げるとか、或は學校に通ふ子供さん達のある家庭では辨當のため一と苦勞なさることですから、店内 に辨當部を設け實費でお分ちすることにしてはどういふものだらうと、平戶氏と御相談いたしました のです。それから平戶本店創業以來の從業員が可なりの數に上つて居り從つて病者なども出來ること ですから、その共濟資金として一割位あてるのも結構でせう。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

店員への利益分配は三割五分位ではどうかと思ひます。個人々々への分配額をきめるに付き、平戸氏は働きぶりばかりでなく調和道の實修のことまで參考にするさうですが、そこは人間の悲しさで時に好惡の情に囚はれることがないではないとの述懷がありましたので、私は本來きめられないものをきめようとするところに惱みがあるのでせうが、これは沐浴齋戒し調和道に依つて心を修め、默禱の内に決定させて貰ふ外なく、其次第を店員にも了解を得、こんなことに餘りこだはらないやうな心を養ひたいものであると申したことであります。

又、平戸氏の御家内さんの臺所萬端の奉仕に對して、相當むくゆべきで是れは五分位では何うかと思ひます。それから殘り一割は積立てゝ置いて財界の風ならぬ風波に對する準備とする必要がありませう。

次ぎに店員の待遇問題ですが、營業時間の短縮を斷行し現在は夜九時に店を閉めますが、やがて八時に繰り上げたいとの話でした。そして、時間の餘裕が出來ても之を善用するやうにならないと困るとて、次のやうな經驗談を平戸氏はなさいました。

『自分は少年の頃大阪の漬物屋に奉公して居りましたが、自分等奉公人の寢所といふのは薄暗い中二階で頭が天井につかへて立つては歩けませんでした。布團か薄いので冬など足が冷えてねむれない爲め、手を揉んでは足に當てして溫めてやうやく夜の明けるのを待つたやうなことがまゝありました。食物も今から思へばヒドイ物で、なまぐさは月に一度朔の日に干物の一と切れがつくだけで、あとは朝が味噌汁、晝は香の物、夕食に煮付けときまつて居ました。しかし其當時の艱難と勞苦が

今日自分にどの位役立つて居るか知れません。かうした經驗から考へますと、今の人格尊重と云ふこと、店員待遇といふこともやさしくはないやうです。』

と。平戸氏はこのやうに早くから勞苦された方によく見るやうに、體格が實に立派できたはれた人といふ感じが致します。平常關西風のアッシを無雜作に着て居られ、初めて店へ來られる方など、どれが主人公だか見分けがつかない位です。己を責めることがまた非常に嚴しく、店員の誰れ彼れが定刻よりも早く起床して受持外の便所の掃除などしてゐるのに會ふと、もうたまらなくなると言はれます。是れは御尤な話しですが、何につけてもまだ足らぬまだいけないでそれにこだはりますと、それがまた周圍に一種いら〳〵した影をなげはしないかと氣づかはれた程でありました。

かうして『道』を中心に營業を祈られると共に店員達の清樂に付いても何かと工夫されて居られます。一時、店員達を慰勞する意味で、月二回か日を定めて活動や芝居に行くことにして居られたさうですが、これはだん〳〵に勝手な希望が出て來て、各自すきな興行物に來月分迄も續いて行つて了ふと言ふやうなことになつて、店全體の空氣がイヤに芝居座めいて、變なことになりさうだつたので、とう〳〵止めにしたが、今はすぐれた藝術的なフイルムでもかゝれば見に行つて貰ふことにして居られるさうであります。

正月には毎晩歌留多をとられるのださうですが、是れは連夜やるので面白味が加はる關係から、しまひには時計を進めたりして店を早く閉めるやうな事にもなり困ることも時にあるさうです。またボーイスカウトの用意なども全部揃つて居り、時には登山や野營など試みられるさうです。去年などは

樂器に小千圓もかけて店員で樂隊を組織し、臺北から月々教師に出張して貰つたさうです。

それから、何分にも大勢の若い店員のゐることで、時には性に關する過もないではないさうですが、茶屋上りや三等傷の事實が分れば即時無條件解雇といふことに定めてあると言ふ話です。何だかの折に私が所謂『神と財とには兼ね仕ふる能はず』で商と道との調和難を申しましたら、それに付いての平戸氏の言葉が實に面白い、

『商するからの人は、大抵慾深かであるから、反つて無慾の態度に出た方が商そのものも繁昌することにもなります。』

と。

平戸本店の事は、大體これ位にして支店の方に及んで行きませう。平心會總會が終ると共に支店めぐりを始めたのです。店の經營の方面ばかりでなく、子供さん達の敎育とか其他家庭向きの事柄についての御相談にあづかるため、平戸氏と弟につれられ、臺北、新竹、臺中、埔里、嘉義、高雄と巡りましたのですが、丁度高雄に着いてこれから協議會を開かうとする時に、父がガンの手術で大學へ入院したから直ぐ歸るやうにとの電報をもらひましたので、急遽旅程を變更し、夜行で歸途に着いたやうな次第で、折角のお招きを十分御奉公が叶はず、心殘りに存じて居ります。本店の主人が前述のやうな人柄でありますので、どの支店へ參りましても他店とはどこかに違ふところが見られ、唯利を追ふものでないといふ風があらはれて居ります。私のお邪魔した支店は殆んど皆調和道の熱心な實修者で、例の實修を怠る者は金百圓の罰金を科すといふ額が、店へ入つて正面の最も眼立つところに揭げ

てあります。調和道の姿勢と呼吸法はさう容易に體得できる人ばかりは居られませんので、各支店の集會では平戸氏が其方を指導され、私がお話をさせて貰ふといふやうにいたしました。各支店とも非常な熱心で其れは惠まれた集會でした。

平心會員日常の生活清規は此度更に練ることになつて居ますが、從來守られて居るものは調和道の實修の外に、現金賣のこと、賴母子講（臺灣では非常な流行で弊害が殊に甚だしいやうです）や、或る種の保險に加入せぬこと、金錢貸借をせぬこと、保證の印を捺さぬこと、五圓以上の寄附は平心會の同意を要すること等で多く經濟的事項ですが、大變爲めになつて居ると各支店とも申して居ました。

又支店相互の聯絡を計るために全島を幾つかの班にわけ、班內の支店同志月二回の通信をし合ふことになつてをり、之れを怠る者は一回每に通信費の十倍を科料として納めさせられる規定であり、此度の總會でも處分を受けたものが二件ありました。平心會の總會は春秋二季に開かれるのですが、その間々に全島を北部と中南部に分けた部會が年に一回づゝ催され、本店だけは各部會ともに出席することになつてをります。

信仰、產業、家庭の三つを合體した生活！　これの實現は中々容易ならぬことで、平戸本支店にこれが既に立派に具體化されてあるとは申されますまいが、その萠芽は、具眼者にはハッキリ見えませう。適當に培ひつゞけますなら、この萠芽こそは、かの亭々天を摩し幾千歲を重ねて尙鬱蒼たる雄姿を保つ阿里山上の紅檜の類となるものだらうと信ぜられます。この萠芽が氣溫かな內地に於てゞなく反つて天熱き臺灣の燒土に見出だされるとは奇しき緣といふの外ありません。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

臺灣の全住民は、大正十三年度末現在で、三百九十五万餘人とのことでありますが、その內譯が本島人卽ち臺灣人の三百七十四萬に對し內地人十八萬、外國人三萬ときいて、領臺後三十年の今日として內地人の發展の寧ろ遲々たるに（よいわるいは別として）案外な思ひがいたしました。汽車に乘りなどしても、一つの車に自分等の外に內地人を見ないことが往々ありまして、白人種の間に居るのとは別ですけれどやはり一種人種的壓迫感とでもいふべき妙にいやな感じがさゝれました。

さてこの十八萬の內地人ですが、大正十二年末の統計によりますと、臺北はじめ主要都市二十二ヶ所に十二萬八千人も在住してゐるやうなわけで、直接農業に從事してゐる者は、總督府の移民施設である花蓮港附近の吉野村のやうなところを除き、あまりをらないやうであります。

專門に調べたわけでないので、內地の資本家がどういふ方面にどれほどの投資をしてゐるのか分りませんが、恐らくひどい搾取の事實もあらうと信ぜられますけれど、これは別といたしまして、內地人の分布狀態が前述のやうなわけであつて、彼等の多くは、內地人相手の商業を共食的に營んでゐるのだといはれても仕方がないやうな有樣であります。

ところが、更に問題なのは、近年本島人が內地人相手の商賣を初め出して、段々勢力を張り、食料雜貨の如きも、平戸商店を除いては、よく本島人の店と肩を列べられるものはないでありませうし、吳服類なども遠からず本島人にやられるだらうと、多くの人から聞かされました。

どこの町を歩きましても、本島人町と內地人町とは格段な相違で、人通りからいつても店に入つてゐるお客さんからいつても比べものにならないほど前者の方が賑やつてをります。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

これはどうしたわけか？

原因はもとより單純ではありますまい、素通りの一旅客が一家言的獨斷を下すことは愼まねばなりませんが、一つ私に際だつて感ぜられたことがありました。それは、本島人と內地人との生活が、大變ちがつてをることであります。そのちがひ方が實に非常であつて、人爲的な方策では、急にどう仕様もないことであります。この一事から、臺灣の色々な問題が生じ、この一事の取扱如何によつて臺灣の問題は、大抵解決がつくかのやうに考へられます。

道を歩く臺灣人をご覽なさい。あの燒土を、男も、女も、子供もはだしで平氣でふんでゐるではありませんか。着物はたゞ間にあへばいゝといふ程度のものしか纒つてをりません。夜ねるにしても商店に働いてゐる若者など、商品の陳列箱の上に板をわたし、その上に蒲團皮のない綿に無雜作にくるまつて橫たはるといつた具合です。湯には、無論、めつたに入りません。食物も生で口にしないといふ特色はありますが、米にしても內地米とは一升で二十錢以上もちがふ臺灣米を用ひなれてをり、すべて簡單至極であります。住居も竹や土くれを用材としたものが多く、床ははられてなく、たゞ寢場所だけが一疊か一疊半位のひろさを三尺位の高さに床がぶつけてあり蚊帳がはられるやうになつてをる位なものです。

マルクスの賃銀學說にきくまでもなく、かうした事情から、本島人の賃銀が內地人に比して遙かに安いために、內地人の店でも、店員といはず女中といはず自然本島人を雇入れることになつたのでせうが、その結果が內地人に恐ろしい問題をひきおこしたのです。といふのは、奉公してゐる間に、本

島人は商賣をすつかり覺えこんで、僅かの資本を工面しては、すぐ店を持つのださうです。ところが、生活費が極端にかゝらないので、內地人の店ほど儲けなくとも立つていくし、從つて目立つて安く賣れるものですから、商業に血の濃い薄いはないと見えて、內地人がドシ〳〵その店で買ふといふことになるのださうです。

ほのかに聞くところによりますと、或は風說にすぎないのではないかと思はれますが、本島人の間に文化協會とかいふ民族主義を標榜する一種の結社がありまして、計畫的に組織的に內地人を經濟方面でやつゝける運動をしてゐるとかいふ話ですけれど、領臺當時など內地人にもずゐぶんひどい事をする者もないではなかつたやうな噂も傳へられてをることを思ひますと、さういふ運動の存在も或は事實のやうに想像されないこともありませんが、それはとにかくとして、內地人相手の內地人の店が年々凋落の非運に向ひつゝあることは爭ふべからざる事實といふことが出來ませう。

本島人を大別して福建人、廣東人となしますが、廣東人は性質純朴で主に農耕に從事し、市街地で商賣をしてゐる者は多く福建人とのことでありまして、彼等は、國旗の守護を受けずに一ケの人間として世界中いたるところ生活の基礎をするゑてドッチリやつて行く支那人の特色たる根づよさを遺憾なく發揮してゐるもゝやうであります。あちらに長年住んで敎育事業に從事してゐる方々、商賣にたづさはつてゐる方々、官吏、辯護士をつとめてゐる方々にたづねますに、悉く、本島人は實に利にさとい、徹底的利己主義者であると、異口同音に答へられます。

『本島人は、だますことを惡いとは思はず、むしろだまされることを間拔けとしてゐるらしい。だ

から、だまされたら、自分が間拔けだつたからと、あきらめて、相手方をごうだまさうかと腐心する。』『物をとつても見つかつたら返せばそれで帳消しだくらゐに心得てゐるらしい。ある內地人の店から品物をぬすんだ本島人の若者を、その店の者が追つかけてつかまへて、每度のことに、こらしめのため品物を取り返してから、なぐらうとしましたら、本島人がガヤ〳〵集まつて來て、返しさへすればいゝではないか、といつて、ケゲンな顏をしてゐた。』『長い取引關係のものでも、少し油斷すると、本島人はよく量目のごまかしをやる。詰れば平氣で直してくる。』といふやうな話を誰彼となく少なくない人々から聞かされました。

人間には生存慾が本具されてあり、與へられた條件の下に、ごうなりして生きて行かうとつとめませうから、本島人にかうした性行が馴致されたとしても、私は一概に高等批評を試みて能事終れりとするものではありませんが、事實を事實として直視し、帝國主義の謬想から放れて、あらゆる民族の生存を肯定する人道主義的立場に立脚して、さてわが臺灣政策の根本義如何と熟慮する時、問題の決して單簡でないことを覺えます。そこに內地人と本島人との間に餘りにも大なる溝がありますから。

次ぎに本島人の生活の內容にふれて話をすゝめてまゐりませう。

本島人の家は、住居も商店も出入口の兩側と上部に、赤い紙などに美辭麗句を書いたものが貼られてありますが、これは舊暮に貼りかへる習はしださうです。さすがは文字の國の人達だけあつて、ごこのを見ても實に立派な書で金釘流のなごは見つけやうつて見つかりません、中には思はず立ちごまら

せられるやうなすぐれたものがございます。この出入口を入つて正面のところに、限つて媽祖——内地の觀音さん格のもの——が家不相應に立派に又場席をとつて祀られてあります。むしろこの媽祖の祭壇を中心に彼等の住居が出來てゐるといつた方が適當かも知れません。媽祖に對する信仰は、餘程普遍的であると見え、町内のそちこちにも極彩色で飾られた精巧な彫刻の施してある御堂がございまして、澤山な供物が上り、參詣人もずゐぶんありますが、いづれも唱へごとをしては、掌大の二つの木片を地上になげて吉凶をトふといふ風で、形は信仰中心にしつらはれてをつて大層具合がよささうであり、採つて以て範とすべきものがありやしないかと思はれましたので、少しばかり調べても見ましたが、多く現世利益の弊に墮してをつて、信仰と生活との合致した點など見當りやうもありませんでした。

本島人の間に、食菜人といつて、字義の示す如く菜食を主義とする一種の宗教團體がありますが、これは佛教の一分派と見なし得るもので、出家せず剃髮せず普通の生業にたづさはつてゐて而かも道を行ずることを信條としてゐるときゝ、市井にある小規模のものも、また遠く山間に俗塵を離れて設けられてゐる何百人を數ふる集團についても親しく調べて見ましたが、内地のやゝ整つた寺院や本山と多く異なる點を見出だせませんでした。新竹街にある齋堂——食菜人の住居を齋堂と呼び、その宗派を齋教と稱してをります——は可なりの數でございまして、その華麗な佛壇の設備や午前三時から起きて二時間以上もかゝつてする毎朝の勤行ぶりや、又絕對に生臭物を口にしない齋戒ぶりは結構でございますが、生業の内容、生活資料の扱方については教へられるところがなく、竹南驛から四里二十餘

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

町も臺車(内地のトロッコ)を驅つて獅頭山といふ可なりな深山に分け入つて訪ねて見ましたが、やはり同樣でありました。きけば、獅頭山の齋堂は、有名なものなさうで、敷石の坂路を何町か登つて行きますと溪流に渡された石橋がありますが、その欄干には「淸心無慾界」と拙くない文字が彫られてあり、尙登り續けると、やがて屹立した岩山のそちこちに極彩色の堂塔が常夏の國獨特な樹葉の茂りをすかして見えてまゐります。こゝへは弟と二人して行つたのですが、全くかうした環境にあつて勤行してをれば私等のやうなものでも少しは心を淸くし慾を無くすることも叶ひさうに思はれました。施設はかやうに良すぎるほど整つてをり、自家經營の發電所まであります けれど、こゝにゐる何百の食菜人——男もをり女もをり、多く若い方のやうでしたが、その日々の行事が、主に佛書研究で、經濟的には寄生々活になつてゐるやうであります。或は内容のよく整つた齋堂が他にあるのか知れませんが、時間の都合で遺憾ながら徹底的に見學が出來ませんでした。

食菜人の話は以上にとゞめて、弟に案内されて弟の托鉢先の本島人の部落を訪ねた時の模樣を申上げませう。弟は臺中の信用組合に奉仕中、本島人と御緣を結ばせてもらひまして、その部落に入り、朝夕の餘暇を、共同耕作地の草とり石拾ひや、便所がないのでたれ流しになつてゐる露地の掃除に獻げたのださうで、寢床を頂いてゐた家へ御挨拶に出ましたら、あいにく御主人が不在でしたが、老婆や妻君が、子供の通譯で、歡迎の意を表してくれるのでした。子供だけが流暢な日本語を話すので、その故を弟にきいたら、公學校といふ本島人の子弟だけを收容する小學敎育機關があつて、義務制にはなつてゐないが、出來るだけ就學させようとするのが當局の方針であり、學校内では日本語の外、

使用してはならない規定になつてゐるためだといふ事でした。（因に內地人の子弟は、本島人とは別に、小學校といふ名稱の施設で敎育されてゐる。）

暫くすると、隣り近所の子供達が何人も〳〵やつてまゐりまして、弟を見ては、ニコ〳〵笑ひながら、日本語臺灣語チャンポンで話を初めました。さうかうしてゐる中に、十一二歲の女の子がヅカ〳〵皆をおしわけて弟の身近くに來て、手をとつて切りにうながすものですから、引つぱられるまゝについて行くと、程遠からぬその少女の家にまゐりました。竹と土壁とで出來た餘り廣くないその住居は、幅三尺ばかりの入口の突當りに例の媽祖が祀られてあり、その後が寢室になつてゐて寢床が二ヶ所設けられ、臺所は別に作り掛けのやうになつてゐます。その日は偶然、何やら少女の家の祝日とかで、主人の弟さんも子供づれでお客に呼ばれて來てをり、入口を入つてすぐ祭壇の前の所に食卓を据ゑて丁度御馳走を初めてゐるところでした。これで、少女が私等を引つぱつて來たわけが讀めました。食卓には、豚肉、魚肉、野菜など、あぶらつぽい料理が、大きな鉢や皿に幾つとなく盛られてあり、米酒とかいふ總督府專賣の無色の酒を、主人はじめ老婆まで盃を切りに重ねてをり、私達にもすゝめるのですが、盃の獻酬はしない習はしなさうです。私が食卓について一寸奇異に感じましたのは、內地のやうに御馳走を各自に分けてとらないで、皆して箸やシアジで一つ器から食べあふことです。『日本わける、臺灣わけない』といつて主人は切りに私達にすゝめられます。酒を飮まない私は、ほろ醉ひ機嫌の主人の示されるちつともわざとらしくない態度に、すつかりびつたりして、舊知の家にある思ひがし、腹一パイよばれました。臺灣料理を臺灣料理らしくいたゞきましたのは、これが初

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

めてゞす。おもゆをしたんで炊く臺灣米のご飯も存外口によいものでした。生で食べるものは一つもありません。食後について出された水まで湯ざましだつたには寧ろ驚きました。他の衛生設備が不完全なのにも拘らず、チブス罹病者は內地人三に對し本島人一ときゝましたが、或は食物の關係からかも知れません。

少女は始終私達の側についてお給仕してくれましたが、いざ挨拶してお別れしようとすると、入口に立つて、弟に此度何日來てくれるときゝ、山口源吾さんは今どこかとたづね、別離の感に堪へないのか、伏目がちにしてよく言葉もきけなかつたやうでした。黃いろ黑い臺灣人特有の皮膚をもつた、さう整つてゐない容貌の、身にはオーヴアーシャツのやうな形の茶葉色の綿服をつけた、すねまで出したすはだし姿は、決して美しい觀物ではありますまいが、私には今に忘れ得ぬ印象となつてをります。

この家の裏を小川が流れてゐますが、弟はこの部落に托鉢中、每朝未明にそこで水浴をしたさうで、たま〳〵物濯ぎに來る婦人がこれを見ると、膚をあらはさないことになつてゐる風習なので、見まじきものを見せられたといふ風に、あはてゝ逃げ去るさうです。かういふ熱い國なのに本島人にはどういふものか極稀にしか入浴するものはないので、こゝの托鉢ではどこの家へ行つてもお湯を頂くわけに行かないものですから、已むを得ず、水浴をとる外なかつたと弟は話してました。

この部落は、東京の猿江裏や三河島にある貧民窟はどひどくはありませんが、無產勞働階級の集團地區には相違ないので、車夫、小商人、職工等を勤める者が多く、家族は家內手工業としてパナマ帽などを編んでゐますが、今申上げた少女の母親は、この邊での勝れた編み手なので皆教へてもらひに來るのださうです。資本主義の毒牙はこゝにも食ひ入つて、スウェツティングシステム（搾汗制度）が行はれてゐると見え、乏し過ぎる工賃しか與へられてゐない樣子でした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

結婚には、まだ賣買婚が盛んに行はれてゐるさうで、勞働者など、五六十圓で妻を買つてくるものがあり、妻を買ふために働いても所要の金額がまとまらないために、中々婚れないでゐる男が稀ならずあるさうです。反對に、金さへあれば二號三號の夫人を蓄へ得るわけで、城のやうな妾宅を構へてゐる者もあり、金力の暴威には、今更ではありませんが、驚きあきれる次第であります。

金のことに關しては、本島人は非常に敏感で、公學校の制帽をかぶつた少年が路傍で一トつまみの飴を引きちぎり合つてその長短で勝負を決するといふやうな簡單至極な方法で賭け事に耽つてゐる光景など、まゝ見受けるところであり、以てどんな風潮が社會を支配してゐるか想見するに足りるでありませう。

しかし、本島人に善風良俗の學ぶべきものがないではありません。食物は實に大事にします。米のとぎ汁、食器の洗汁、食物の殘滓なども決して無駄に捨てることなく、必ず豚家鴨等を飼つて之れに與へるやうにしてゐます。祝日や宴會を除いて平常飲酒する者が少ないといふのも、學ぶべき點の一つでありませう。食後に洗面する習はしも結構だと思ひます。文字に對する尊重の念は格別で、公共の建設物にしても個人の家の塀や壁にしても、乃至は便所の中にしても、落書といふものが殆んど絕無なのには、奇異な念ひさへいたされた位です。村落へ行つても文字の書いてある紙片などその邊に散らばつてゐますと、之れを拾つて字紙爐で燒き淨めるといふ話しです。婦人が髮を大事にすることは、また想像の外で、常に美事に結ひあげてをり、亂れ髮のあだ姿などは求むべくもありません。市街地の連續した家屋の軒下が共通の步道になつてをり、これを亭仔脚と呼んでゐますが、內地でも雪國に限らず雨の多い地方では之れを模してはどうかと思ひます。（つゞく）

附記　本稿は大正十五年二月廿一日東京一燈園武藏野道場に於ける講話を、野木典郎兄の小生には分に過ぎたる御奉仕により筆記していたゞいたもの、つゝしんで深謝の意を表します。恭禮

省みて

八田勝三

何一つとして他の方より特異の性能を持ち合せてゐるやうにも思へない私には、勢ひ一切他の成長に役立たせて頂く事によつて、自分の受持を果す外、私の生きる道はないやうに思はれる。自ら仕事をするのでなしに、せめて適材が適所に居つて頂けるやうにお祈り添えさせて貰うことが、聖業に參加し得る唯一の持場のやうだ。時に動き易い若い心は、斯くありたしと思ふことの實現の遲さに焦れて、自らその衝に當らうなど思ふが、一度自己を省みれば忸怩たらざるを得ない。心から皆樣の下僕になれるやう又皆樣もその意りで遠慮なしにお役にたつ事があれば御使ひ下さるやう懇願する。

□

時ならぬ時に目覺し時計が鳴り出したので、うるさいなアと舌打ちをして、後で氣がついて自分の勝手なことをつくづく恥かしく思つた。鳴るやうに誰かがねぢをかけておいたから、忠實に役目を果した時計を、まるで罪があるかのやうにたとへ一瞬間にしても責めるやうな氣持になる醜くさを、一體如何すれば治るのか？

□

『行つて參ります。』
『御苦勞樣。いつていらつしやいまし。』

典座さんの御部屋の前に立つて、遠くへ托鉢に出掛けて下さる方を見送る時の方が、顏を見合はしてゐる常よりその人に對して私の心は至純である。少なくとも其時だけは、心から幸多かれと祈る心だけで、阪道を下りてあの靈鑑寺の蔭へかくれて見えなくなるまで、遠ざかりゆく後姿を拜むことが出來る。遇ふ喜びには、時に利己的な感情も入るが、見送る際には、相手の上のみを思ふ心で淨められるやうに思ふ。

□

昨年の九月にお目にかゝつた次の日から、氏

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

神様の境内を掃きにいらつしやるやうになつたYさんが、晩秋の或朝、何時もの通り默々と箒を動かして居られた。漸く掃き終えて一寸振り返つてみられると又木の葉が大分落ちてゐる。折角奇麗にしようと思つて來たのだからと再び掃かれたが、一陣の風に落葉は又元のやう。三度掃いても同じ事なので、恨めしそうに梢を見上げられたが、暫らくしてYさんの顔には輝かしい微笑が見えた。

『木の葉は皆落ちて了へばそれ以上落ちつこはないわけ。私は今まで奇麗にすることに囚はれて居た。掃かせて貰つてさへ居ればそれで好いのぢやないか！　囚はれてゐるのが凡夫で、囚はれまいと焦つてゐるのが人間で、そこを超越して了つたのが佛の境涯ぢやなからうか？』

こんな話を先日お遇ひした時、なすつてゐました。

□

これはIさんの御言葉です。

『一燈園のお方は最早や道に即した生活をなすつていらつしやるのだから、其上は道を云々しないで仕事の能率を上げる事に腐心して下さつたら有難いし、一方托鉢を御受けする方は、能率を問題にするのなら專門の人に來て貰ふとして、同人の方からはその生活のたて方に就いて拜ませて貰へば好いのぢやないでせうか？　それが時々同人の方が第一義を托鉢先に求められ、托鉢先が仕事を主に考へて、折角の御縁が臺なしになるやうな事がありますが、惜しいことで御座います。』と

□

『眞理も聞く人によつては躓かせる種になることもある。寶刀も鞘に收めておかないと、相手を傷つけ、自分をも害ねることがあるかも知れない。』

□

『優しすぎる事も時には障りを作る。』

此頃天香さんから敎へて頂いたことである。

—大正一五・二・一七—

生死托鉢（中）

住田無相

以前のことは知らず、入園後の彼は、道を求めるの念には可成り熾烈なものがあつた。たゞ併し貴族主義的であつた彼の感情には、一燈園の托鉢の下坐行と形の醜さとに、どうしても融け合ふこととの出來ぬ苦しさを持ち通した。一燈園以前に南天棒老師に參禪しまた昵懇であつた因緣からでもあらうか、彼の思想は禪宗的な解脫、悟りといふやうな方により多く傾いてゐたやうである。彼は酒の中毒のために可成りからだを害してゐた。視力は弱く、足は不自由であつた。それにも拘らず、園内で出來る托鉢を自らさがして、薪割りをしたり、畠にこやしをかけたり、また便所の汲み出しをさへ厭はなかつた。酒に覺めてゐる時の彼はかうして懺悔に身を打ち込んだのであつた。一燈園の離れの小さい部屋へ來ては、二人差し向ひで二三時間位づゝ坐禪のやうな氣持で坐はつたこともあつた。さうしては、道につき、人生について語り合ふた。そんな時の彼は極めて眞ぢめで辛辣であつた。酒によつて過つことも多かつた後ほど、それは強く鋭どくあつた。かうして、自ら責め、懺悔し、靜觀しつゝあるうちに、彼は遂に一燈園內にあんかんとしてをられなくなつたものらしい。四國巡禮に出たいと自ら發心した。その相談をうけた時、私は彼の氣持をよくきいて、そして彼としてはそれも一方便であらうと思ふて讚同した。その時、『四國巡禮は私には究竟の修行ではない。もしその途中でも宜しい。何處か有緣の寺でも菴でもあつたら、私はそこに止まる。何處かにあるやうな氣がする。そこで私は必らず解脫する。』と言つたが、この言葉はこのやうな最後となつた今、私には深い意味あるものゝごとく思はれるのである。

彼は一燈園の人としては、一概に言つて了へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

ば、一燈園の人らしくない人であつたとも言へやう。けれども、彼はその一生涯を以て此の大きな人生に彼自身知らぬ托鉢をしたのではあるまいか、と今私は棺を前にして思ふのである。

人は生れ、生活し、そして死ぬる。此のことは、すべて生れたる人間にとつて、可否は別として、恐ろしい自然律であり、して亦不可抗力である。誰人も生れ、生れて、生の本を知らず、死に、死んで、死の先に暗い。人は生活しつゝ自分の自由意志で生活して居るものゝ如く思ふて居るが、はたして己が意志通りになつてゐることがその何れだけあるかは疑はしいことである。大部分は何か知らぬ外的力と、自由意志と稱する我見我慾との衝突矛盾によつて釀成されるものゝやうである。大乘起信論には忽然念起之れを無明といふ、そして、此の一點の無明が眞如法性に薫習して永劫流轉の本をなすといふやうに說かれてあつたと記憶するが、恐らくはさうだらうと思ふ。忽然念起せる無明である。それは誰もが知らぬのである。知らずして人は生じ、滅し、そして生活するのである。その生滅無常の間に喜怒哀樂の種々相を現ずる。

己身を靜觀せよ。世の常の人の生活は喜怒哀樂、愛憎恩怨の種々相を離れて生活はないやうである。愛着の一生であり、苦惱の一生である。愛着するが故に苦惱であり、苦惱なるが故に愛着するのではなからうか。さらばその一切を捨てよといふて捨てられぬのが、人間心のあわれさである。知らずして罪を重ね、罪なくして責められることもある。

罪なくして生きられぬ人間のいのちを私は悲しむ。まこと罪なしと佛神の前に立つて毅然として言ひ切れる者がどれだけあらう。一度生れては、多かれ少かれ、みな〳〵そこばくの罪を重ねるのである。それは無始よりこのかた纏縛せる罪業の催すところであらう。

凡その場合人は知らずしてなしてゐるのであ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

る。知らずして善を行じ、惡を行じてゐるのである。己れをはりつけにかけた人々のために、『父よ、彼等を許したまへ、彼等はそのなせるところを知らざればなり。』と祈つたクリストの言葉は深き奧義をもてるものと思ふ。私は人間の苦惱罪過の元を尋ねて愛慾に至る、愛慾の元をたづねて妄想に至る、妄想の元をたづねて無明に至る。無明は一切煩惱の極るところである。もろ〳〵の惡業はみな〳〵無明愚痴の所造である。無明を退治し切れぬ限り、わたし達は罪なしとは言ひきれぬ。

世の善人有德者と仰がるゝ人は幸福である。されど、惡人悖德者と責めらるゝ者の心はまた深刻である。

人は悟れるつもりでまことは迷つてゐるかも知れぬ。迷ひに迷へる者の反りてその秘奧なる心靈に於ては明智大覺の菩薩なるやも計られぬ。私は罪人惡人等の一生涯を思ふと、それは高僧聖者のいみじき生涯に接すると同樣なる感銘を覺える。此の兩者の間には何か一味の共通點があるやうである。一は人生を汚瀆し、他は人生を淨化したものである。されど此の兩者は、共に人生の最も深刻なるものを觀、人間苦の眞唯中に身を投じたものである。此の二種の人物が心身に受けた大苦惱は到底常人の堪え能はぬところのものである。

私は今しみ〴〵とHさんを思ふ。彼が悲しくも酒癖によつて破滅させた一生涯は、まことは彼自身知らぬものではなかつたのではあるまいかと。

もし私達が心の本源を悟り、大自覺を以て行ずるならば、此の人生の一切事はみな〳〵お光りより來れる托鉢ではなからうか。自他一切の罪障を知るが故に懺悔に入り、懺悔は大慈悲の心を生じて托鉢に出るのである。人生に苦惱あり罪ありと識り、それを除き救はんと發願せる者には、道は二つある。一はその罪苦を除き淨める道で、他はその苦惱を代つて受ける道である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

東京一燈園武藏野道場開扉の歌其他（一）

野木ふみを

十月十七日雨　道場開扉式に間に合はんとして

近道の篠籔垣の烏瓜濡れつつ光る我は急ぐに

笹の葉の青にからまるものの色よくは見ずして心をいそぐ

わがい行く遠き秋野の一つ家檜原が裾に屋根ぬれて見ゆ

式

秋草の亂れ路を來て法の燈の光明の間に坐りつるかも

しづけくも木魚音する新室に香の煙りの立ち直りつつ

衆讃經降伏四種魔勝幡建道場云々

この時雨止み霧降れり

今建つる大きみ幡と天雲はこの舍繞り靡きたるらし

天霧らひみ霧の降るは天つ神くにつみ神のいざよひ給ふ

天に向ふ清きみ門と旗すすきの靡かう舍に諸天遊ぶらし

道場清規朗讀さる

この道の自づからなる戒にかげひなたなく我らはあらむ

この家に行ふ人は新梁の匂ふが如くまがなしくあれ

式畢つて靜座光明祈願の心を憶ふ

卽ち第一章より

東雲の光に感りて開く華の散るすべあはれ水に泛さふ（蓮華）

萠え出づる草木を見れば一つ日の光に向けり咲かむと思ひて

しげり競ふ花野の蜂はあしたより休むことなし冬に入るまで

天地のありのままにいちじゆくは花を開づて自が果を結ぶ

たらちねの乳に手をおき眠る子のたり頰ま愛し笑まふさすらし

人々のさま

しづかなる立居ふるまひにすずろなることほぎごころあらはれにけり

雨止みて裏戸ひらけば幹繁き檜原をこめて夕霧の雨

その夜

宵更けて降る秋雨のかそけくも口をつぐみて人ら坐れり

室てらす石油ランプはほのかなれや壁に寄り居てものいふ面かげ

新室に思ひ深むるわが共の魂あひ寄りて睦みけるかも

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

未明の先驅者（五）

水上鐵次郎譯

「光」誌上に連載を許されたこの拙譯の原文が、イギリス勞働黨機關紙『デーリー・ヘラルド』に出たものであることは、第一回のとき申しました。その當時、原著者は自由黨系統の文士だとばかり信じてゐましたが、本回の原文を見ましたとき、匿名で“R.W.P.”と署名してあるのに氣がつきました。而して文體から考へて、之が勞働運動史及び社會主義思想の研究者として、その著書『勞働者のインターナショナル』、『ボルシエヴイズム研究』その他で日本にも知られて居るR. W. Posgate氏ではないかと思ひました。原文はヘラルド紙に時々歷史的年代などには無關係で記載されたもので、それから譯出したのですが、本回以後は、イギリス勞働運動史上の人物を年代順に譯出して行くことにしました。

六、クロンウェル

セント・ニーツや、セント・アイヴスや、はたハンチンドン、ケンブリッヂなどは、十七世紀頃には、東部イングランドの中心地であつた。今日でこそ、それらの地方は大して重要なところではなくなつたが、當時に於ては、イギリス社會の中堅勢力として、壓制と暴虐とに對しては飽くまで抗爭反擊を加へんとの烈々たる氣慨を以て知られたる獨立不羈の小農階級の多くは、その地方を根據地として居つたのである。マーストン・ムアの原頭にルーパートの鐵騎を粉碎せる鐵甲隊の人々もその地方から出たものであつたし、又、わがオリヴア・クロンウェルその人もこの地の產であつた。

クロンウェルの果斷敏腕と剛毅不屈の魂とは、

實にその郷國の賜物であつた。彼は、彼と行動を共にした人々とは異つて、曾て理論の迷路に囚はれて去就に惑ふ如きことはなかつた。彼にとつては、苟しくも〇〇と僧正とに反抗して自由の爲めに身を捨つる以上は、アナバブチストとか、獨立派とか、長老派とかを、一々區別する必要を認めなかつた。

苟しくも自由を無視する以上は〇〇を殺すも憚らずとの彼の常識的宣言こそ、實に當時の同志をして愕然として言なからしめたものであつた。彼が大義に殉ずる熱誠に感じて、その鐵甲隊を選拔せる氣持は、やがて二百五十年後ロシアに於ける赤衞軍組織を偲ばせるものであつた。

一度戰線に出づるや、彼の行動は、端的直入的、些の躊躇もなかつた。彼目指すところは、一に『神の勝利』のみであつた。然しながら一度共和國保護長官の任に就くや、幾多の難問は續出して、彼の解決を求めたが、それらに處するに際しても、彼は一刀兩斷的に出づるのみであつた。彼にとつては、アイルランドの如きは、法王派と復辟派の棲窟にすぎず、之が處置としては唯硝煙彈雨あるのみであつた。内政上に於ては、彼はあくまで議會主義を尊重したのであつた。唯、彼は議會が彼の希望する如く動くことを欲したのみであつた。之は、少くとも彼一人にとつては正當な要求であつた。

『ランプ』議會をば、彼は陰謀の巢となし、それに代へるに、選拔の革命家で組織した『ベヤボーン』議會を以てした。しかも六ケ月にして彼はそれを解散してしまつた。次に召集した議會と爭つた彼は、年内にそれに對して解散を命じた。更にまた議會を召集したが、それとても二ケ年ならずして、解散してしまつた。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

彼は、心ならずも專制者となつたのである。彼の事業の永續性なきことは、彼の夙に知つて居るところであつた。又、健康を害して居つたことも感じないではなかつた。『護衞兵の先頭に立つた馬上の彼を見たとき』と、クエカー宗のフォックスが書いて居る。『私は、死の息吹を感じた。彼のところまで行つて見ると、彼は死人のやうだつた。』と。斯くて病漸く重るや、彼は憤然として死に反抗したのであつた。『わしが死ぬなんて、あり得ない』と彼は云つた。しかし一六五八年九月三日には彼は死んでしまつた。その後二年にしてチャールズ二世王は即位したのであつた。

○本號表紙題字 は趙子昂筆『證道歌』のうちよりいただきました。

クリスト教社會主義史

著者から――社會改革後に於ける謂ふ所の眞の人類史第一頁も、もし各人の生活に靈的體驗の光耀がないなら、晴を點じない畫龍と選ぶ所がなからう。● 自己の生活が、今、検討の對象たる資本主義存續の因をなすことないかを深く省察せんとせず、たゞ口頭に組織惡を論難攻擊して能事了れりとなす社會運動家に吾等は與することが出來ない。◆現實の生活を離れて信仰なく、時代の苦惱に對する具體的解決策を度外視しての祈禱も奉仕も閑人の骨董いぢりを去ること餘り遠くはあるまい。不勞所得に食んで死屍取扱人たるに甘んじ、日常の生活資料の淨不淨すら點検せんとせずして、徒らに本來不可説なる『神』を教壇に演述して慚ぢない宗教家は、僞りの尊嚴のほか何物であるか。◆或は右傾といひ、或は左傾といひ、又或は對內的には少しく左傾にして、對外的には少しく右傾にといふ。いふものをしてその欲するがまゝにいはしめよ。それ〴〵の見地に立つならそれ〴〵に可なるものあるのであらう。たゞ、社會再建は空論にては駄目、よく人性を明察し又社會組織進化の理法を正解しあくまで生活の現實に即した運動たるを要する。◆かくてクリスト教社會主義者の步んだ道は吾等に意味深い暗示であらればならない。

（松下吉衞著、代價參拾錢、東京市小石川小日向臺町二ノ一文化學會發行・振替東京七二八〇）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

働く者の家日記

S　T　生

一月一日　晴　日本晴の元日なり。七時宿泊者及び同人一同で祝賀式を擧げ、後御雜煮供養。初風呂あり。諸君の喜悦滿面に溢る。松下兄栃木より來所。十二時門前にて記念撮影。後、光明の間にて同人年頭の感を述べ合ひ、各所へ寄書して出す。

三日　晴　正月氣分濃厚にて二階の部屋から聞える聲色も春らしく、娯樂室に棋局また盛んなり。醉へ歸る人あり、語つて連れだつもあり。たゞ勞働者の明日なきふところの乏しさを如何。夜は二十一號室から洩れる拳の懸聲が春宵に華を添へてゐる。今宵月寒く冴える。

四日　快晴　正月も四日になつたのでぽち／＼仕事に出かける方も見受けしもまだ求め先が尠いらしくあぶれ多し。夜宿泊料納入を調べしに昨冬よりの滯納數三三〇日（内お正月のためは二七〇日）前納數七〇日。本日光食堂休業。

五日　朝より曇がちにて寒氣殊の外甚し。屋外勞働者の勞苦思ひやらる。夜七時より新年會を兼ねて茶話會を光明の間で開き皆さんの隱藝等に一同歡を盡して八時半閉會。

八日　晴、夜初雪　今朝諭示退舍二名、亂醉常習者K、怠慢者I。高坂兄愛の家へ御托鉢。松下兄午頃來所一時出られ夜歸所。寒氣そゞろに入寒を知らしめる。夜初雪ちらつく。近時門限（夜十時半）をおかす人あり。

九日　小雪後晴　松下兄十時外出。餘つた餅を「子供の家」で吊して貰ふことにした。午後深澤忠善兄來所、板橋方面で「子供の家」移轉地借入に就いての御話を承りしも明日中新井にて松下

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

兄に御會談を願ふ事にした。今夜八時京都から谷田部兄歸所、スグ道場へおかへり。

十日 快晴 朝九時中新井の道場へ同人會に往く、同人全部集會。五時德水子歸所。德水子喉を痛む。

十一日 晴 臺北市湊町稻江義塾の方三名午後六時頃來所參觀九時退所。同人神谷兄御來訪午後六時頃國分寺の托鉢先へお歸り。

十四日 晴 十時半頃府社會課の深江氏板橋の借地の件に付御來所。今度松下兄が十八日に神戸出帆の扶桑丸にて基隆の平戸本店へ呼ばれて行かれるので今夜九時四十分の急行で京都へ出發、德水子驛まで見送る。

十七日 晴 第三日曜なる上に藪入日の事とて不就業者多かりき。

十九日 曇後雨 大内子と代つて齋京子が托鉢下さる。寒いせいか在舍者多し。

嵯峨主任は、府廳に開かれた委託簡易宿泊所聯盟會議に出席され六時歸所。

二十日 快晴 四五日不順に温かなりしも今朝は寒さきびし。市の救濟仕事が大分出るので失業者も少し。暦賣る人未だ五六名を數ふ。

二十一日 晴 明日内務省から「子供の家」へ參觀に來られる豫報を得たので午後から齋京子に托鉢に行つて頂いた。小使さん公休。

二十二日 晴 昨朝今朝は本年中の寒さのレコードならん、九時頃珍らしく木魚子と長谷川榮一郎子と來訪。道場へ廻らる。

二十三日 晴 朝、德水子は「子供の家」の水道の件に付水道局へ出頭。午後三時名古屋の海野様方より大野詳兄來所暫くお托鉢の由。

二十四日 快晴 第四日曜同人休養日、朝、德水齋京の兩子は中山法華寺に參詣に行かれ三時歸所。夜は同人會に集まられし方、客二人、同

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

人八人、珍らしく磯山兄來所して泊らる。
二十七日 晴　齋京子に「愛の家」から道場へ廻つて頂く。一時頃谷田部兄の御母堂と弟さんとが御來訪下され二時「子供の家」へお伴れ申しそれから道場へ行つて頂く。四時頃深澤兄來所、板橋の借地の件はほゞ順調にはかどつてゐるとのお話。所内いよ〳〵と靜穩無事。
二十八日 晴　三時内務省より今野富造氏來所子供の家の助成金申請の調査のための由にて德水子子供の家へ御案内申し打合せ終る。松下兄より着臺のおはがき來る。
二十九日 曇　德水子齒療の途中黎明館を視察せり。夜谷田部母子三人お泊り、蓄音機等に興を添へ御待遇申す。野木、大野兩子も市內托鉢のためお泊り。
三十日 曇　谷田部母子方今朝歸途につかる。夜六時頃內務省の方が佐賀市學務委員西勳氏を御同伴來觀下さる。
三十一日 雨　久し振りの降雨。宿泊料納入狀況は正月の事とて多少氣遣はれしも二十日頃より漸次率上り殊に月末に至り好況を示し九六%の好成績なり。
一月中宿泊延人員三、〇〇九人、收入(宿泊料)五八一圓六〇錢、支出四九一圓六錢、貯金高三四四圓六〇錢
一月中事故調査、喧嘩三、門限遲刻十二、亂醉者九、盜難五
二月一日 晴　月末の計算にて忙し。朝幸にも大內子來所お手傳ひを願ふ。後布團を干す、尙庭木に施肥を大內子にお願ひした。夜は茶話會を開く、光明の間滿員の盛況なり。それ愛は神か、融和の兆ありがたし。
二日 晴　三時頃警視廳より高木刑事來所、先夜の銀座騷擾事件に關し〇〇氏の部屋を調べら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

る。後、相生署より刑事二人來られ張込中、〇〇氏歸宿せしを本署へ同行さる。

四日　曇　雨かと氣遣ひし空も一日持ち耐へた。頃日の不就業狀態は週期的休養のためか。今朝の讀賣紙上に「子供の家」の竹原先生の記事が揭る。献身のお托鉢、宜なりと欣快に堪へず。

五日　快晴なるも名物の空ッ風！

午後より嵯峨子大島宿泊所へ聯盟委員會に出席全員出席。席上宿泊者操縱策及經營手段等を談合ひ卑見に讃同を受ける。舊冬來暦賣りをした松浦氏の奮鬪は報いられ金六十一圓の貯金が出來た。

八日　曇　頃日アブレる人が多い。仕事を好き嫌ひするせいか？　食堂の景氣があまりよくない。

十一日　晴　紀元節。十時「子供の家」の式に谷田部兄德水子參列。兄は午後からある府廳の下賜金及助成金傳達式に行かれて賞狀と金一封を頂く。今日は紀元節と併せて建國祭が擧げられたので當所でもこれを奉祝して大茶話會を開いた。

十四日　曇後晴　同人久慈觀梅デー。集まられしは江原、大槻の宿泊人と平松夫妻子、栗原、谷田部、德水の諸子。九時出發澁谷驛にて同人大內、古田、大野の三子の待たれるに會ひ『子供の家』よりは大槻、野木、鍵山の諸姉來り會し十二時久慈梅園に著く。こゝにて「愛の家」の一團相賀、市尾、齋藤の方々と合し、總て二十幾人。あゝ難有し恵まれた一日の行樂！

老梅數株開南枝　　谷田部

ゆくりなく供して嬉し梅見哉　　大槻

身は雲水地は玉川の久慈の梅　　大內

俗を離れ俗に還へるや梅の花　　德水

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

近代文化と一燈園

西田天香著　（代價三十錢）

内容――「お光り任せ」は消極でない、失業問題と一燈園、燈影小塾について、心の屑籠、外人の觀たる一燈園生活

一燈園生活問答

松下吉衞著　（代價十五錢）

内容――きわめて平易な問答體で、一燈園生活の眞生命、修行ぶり、在園者の日常生活、諸宗教との關係、進化論觀、社會運動觀等お述べたもの。附錄、道場淸規

購讀申込所

京都市烏丸頭下總町　回光社
振替大阪五九八三九、東京五七六七一

東京市小石川區小日向臺町　文化學會
振替東京七二八〇

一燈園經要

御希望の方わ實費・送料廿二錢（二錢切手）左記えお送りください。

東京市本所區林町二ノ七八　同勞會

●本誌創刊號第二號

目下再版準備中につき御希望の方わ此際回光社宛御申込くださいまし。

大正十二年十二月二十四日第三種郵便物認可　毎月一回十五日發行　「光」第五十一號　代價貳拾錢
編輯人　東京市本所區林町二ノ七八同勞會内　松下吉衞
發行兼印刷人　京都市烏丸頭小山下總町五回光社内　西田保太郎